

国立大学教員養成学部における 電子キーボードの活用

白川 紗弓 井上 洋一

1 はじめに（国立大学教員養成学部の現状）

(1) 国立大学教員養成学部の再編

少子化を背景に、全国の国立大学教員養成学部は、教員養成に特化する方向で再編が進んでいる。教員養成を目的としない学科や課程（いわゆるゼロ免課程）の学生募集を停止し、教員免許取得を卒業要件とする課程に定員を割り振ったり、高齢化や国際化等の新たな課題に対応した学部を新設したりするなど、各大学の社会的役割（ミッション）に応じた抜本的な改革が求められている。

(2) 愛媛大学における音楽科教員養成課程の変遷

愛媛大学教育学部は昭和24年、愛媛示範学校を母体として誕生し、昭和34年、特別教科（音楽）教員養成課程（以下「特音」、定員30）が設置された。「特音」となると、小・中学校の教員養成課程の中にも音楽教育専修がおかれており、各学年に約40名の学生が音楽を学んでいた。音楽専攻生の合同授業も多く、教員は両課程の兼任であった。愛媛大学の「特音」は、四国で唯一の「特音」として、四国全体の音楽科教員養成の中心的な役割を果たすとともに、学校教育に限らず、地域の音楽文化向上に大きく貢献してきた。その後、「特音」は教員免許取得を義務づけられないゼロ免課程に引き継がれることとなり、平成8年度から情報文化課程音楽文化コース、平成11年から芸術文化課程音楽文化コース（以下「音文」、定員20、平成20年度からは定員10）に改編した。

平成28年度、愛媛大学では、地域との連携を強化した文理一体型の社会共創学部が誕生した。新学部設立に際して、教育学部のスポーツ健康科学課程が新学部のスポーツ健康マネジメントコー

スに移行し、教育学部全体の定員が減少した。しかし、愛媛県では大都市圏に遅れて教員の大量退職時代に突入することとなり、教員不足（特に小学校）が懸念されることから、初等教育コースの定員を増やし、「音文」も含めてゼロ免課程は廃止となった。そのため、中・高音楽科教員養成課程は学校教育教員養成課程中等教育コース音楽専攻（定員4）のみとなった。

(3) 入試改革

①実技内容の変更

改組に伴い、入試における音楽の実技試験内容も変更した。中等教育コース音楽教育専攻では、任意の楽曲の独唱または独奏の選択試験に加えて、ピアノ独奏、中・高歌唱教材の弾き歌いを必須とした。筆記試験においては、単なる楽典の知識を問うだけではなく音感・論述・創作問題を含めることとし、音楽科教員に必要なバランスのとれた資質・能力を求める内容となった。なお、初等教育コース小学校サブコースにおいても学科試験に替え、音楽の実技問題を選択することができる。ただし、中等教育コースと配点が異なり、また、音楽実技を選択して入学しても、卒業研究を音楽とする必要はない。

②定員減にともなう影響と課題

愛媛では、県内で唯一、音楽を学べる大学として愛媛大学「特音」・「音文」という意識が定着していた。中等教育コースだけでは定員が少ない上に、「音文」で実施されていたセンター入試を必要としない推薦入試もなくなり、受験生にとっては、ハードルが上がった印象を与えている。その結果、予想以上に願者が少なく、これまでの2回の入試倍率は1.5倍を下回っている。また、配点や実技試験の内容の変更の影響からか、大学入

学までに管・弦楽器や声楽の演奏経験をもった受験生が減少している。

(4) カリキュラムの見直し

改組後のカリキュラムでは、従来の「音文」の教育環境や資産を生かし、声楽、器楽、音楽理論、作曲、音楽学、邦楽等、幅広い分野を学ぶほか、少人数制のレッスン、グループ授業やゼミをより充実させるとともに、これまで同様、学年合同による大人数の合唱や合奏を通して、音楽科教員に必要な実践的指導力を身に付けることとした。

愛媛県は小規模校が多く、複数教科を担当できる教員が求められており、また小中一貫校・中高一貫校が増加していることから、複数の学校種の免許を持つ教員も必要になっている。音楽以外の複数免許の取得に対応するとともに、4年間を通じてさまざまな教育実習・学校体験を提供する。

定員減により、各科目の履修者も減少することが心配されたが、複数校種・教科の免許取得のために専攻生以外も音楽の専門科目を履修している。合唱や合奏では、他学部や他大学との単位互換制度によって近隣の私立大学の学生も履修しており、従来と変わらない規模で実施できている。一方で、履修者により楽典に関する知識、読譜能力や演奏経験が大きく異なる点が、一斉指導型の授業の障害となる場合がある。初学者のために基礎科目を設けたり、重複履修による単位加算を認めたりするなどの改善も行っている。

2 電子キーボードの活用

(1) 愛媛大学音楽教育講座の楽器・設備

愛媛大学音楽教育講座では以下の設備・楽器を保有している。

大演奏室1、小演奏室2、個人練習室22、楽器庫、音楽資料室、ピアノ37、チェンバロ2、電子ピアノ1、エレクトーン1、電子キーボード4、3管編成オーケストラ楽器一式、吹奏楽器一式、和楽器（箏・尺八・三味線等）

上記以外にも、各教員研究室で保有・管理している教育楽器（ハンドベル、トーンチャイム、コダーイ楽器、ギター、リコーダー）、電子ピアノ、

シンセサイザー、幼年教育講座が保有する電子キーボード20、等がある。

(2) 電子キーボードのメリット・デメリット

【電子キーボードのメリット】

近年になって、管弦楽器専攻生の減少、授業や演奏形態の変化によって、電子キーボードの活用機会が増えている。これらは、電子キーボードのメリットに期待しているからである。

○演奏技能の差に対して平等

音楽専門科目履修者の中には、音楽専攻生以外や楽器経験が少ない学生がいる。しかし、鍵盤ハーモニカの演奏経験は共通であり、電子キーボードは比較的、演奏が平易で、演奏技能の差に対して平等である。

○豊富な音色により吹奏楽やオーケストラなどを表現

定員減により、管弦楽器の演奏経験をもつ学生が少なくなった。愛媛大学音楽教育講座の研究室に所属する学生による自治組織「楽友会」では、学生主体の様々な演奏活動を行っている。電子キーボードの豊富な音色を活用して、様々な編成のアンサンブルを行っている。

○持ち運びが容易

初等音楽科教育法や共通教育科目では100人規模の授業があり、ピアノがない大講義室では、電子ピアノやキーボードを持ち込んで授業を行っている。また、地域の福祉施設、病院、小中学校等に出向いた訪問演奏にも持参できる。

○ヘッドフォンやPA併用による最適な音響空間づくり

一斉授業においてもヘッドフォンを用いて個人練習の場を設定できる。また、PAを通して出力することにより、音量や音色等の調整ができる。屋外や学校の体育館等での演奏でも最適な音響空間を設定できる。

○コンピュータ、タブレットPC、スマートフォンと接続可能

MIDIケーブルやBluetooth・Wi-Fi接続によって、コンピュータ、タブレットPC、スマートフォンの音楽ソフトウェアと連携できる。

電子キーボードのデメリット（新たな問題点）】

一方で、電子キーボードのデメリット（メリットを生かし切れない問題点）も浮かび上がった。

○エレクトーンを演奏できる学生が不足

器楽基礎、鍵盤楽器、初等音楽等で、鍵盤楽器の演奏技能を習得するが、エレクトーンの使用や足鍵盤の技能について学ぶ科目は、現在のカリキュラムの中に含まれていない。

OPAの設置、ミキシング操作等、演奏以外の知識や経験が必要

レコーディング、コンピュータミュージック等について、個人的に興味をもっている学生以外、PAやミキシングの知識や経験が乏しく、セッティングやミキシングは一部の学生にしかできない。

○電子キーボードのための編曲が必要

原曲から電子キーボードにトランスクリプションするには、移調楽器の知識や基礎的な編曲技能が必要である。「特音」・「音文」時代には、吹奏楽の経験から移調楽器やオーケストレーションに詳しい学生や、作曲・音楽デザイン専攻の学生が、アレンジを担うことが多かった。ピアノ以外の楽器経験がない学生の割合が増えており、実践的に編曲技法を学ぶ科目が必要がある。

(3) 愛媛大学での活用事例

○ミュージカルの伴奏

楽友会主催の定期演奏会や附属小中学校で、ミュージカル公演を行っている。以前は、生の管弦楽器による小オーケストラ伴奏であったが、近年は、エレクトーン・シンセサイザー・打楽器を含むハイブリッドオーケストラによる伴奏である。

○アウトリーチ

自治体や公民館、福祉施設、病院、小中学校等から、各研究室や楽友会に出張演奏の依頼を受けることが多い。音楽を通じた社会貢献活動として、大学からも奨励されている。会場やリクエストに応じ、管楽器を含めた様々な編成でプログラム構成を行っている。

○ソルフェージュ・創作指導

クレ読み、移調読みの演習として「ソルフェージュ基礎」では、キーボードアンサンブルを導入している。また、音楽デザインの授業では、スマ

ートフォンの音楽アプリを用いて創作活動を行い、音楽科教員としての創作指導法やICT活用能力を身に付けることに役立っている。

3 おわりに（課題と展望）

(1) 受験生獲得に向けた高校への広報活動

「音文」募集停止の反響は大きく、県内の高校生から「愛媛では音楽が学べなくなった」の声が聞こえてくるようになった。音楽専攻生の定員は激減したが、音楽科教員としての資質・能力の育成を目的として、従来以上にカリキュラムの充実を図っている。「ソルフェージュ基礎」「声楽基礎演習」「部活動指導実践論」等、新設した科目も多い。愛媛でもしっかり音楽が学べることを、高校生にアピールしていきたい。そのためにも、教員採用試験の合格実績の向上や、更なるアウトリーチ活動の充実を図りたい。電子キーボードは、このために、最も効果的な楽器である。

(2) カリキュラムの更なる見直しと後継者の育成

電子キーボードの活用を阻む問題点の解消のために、カリキュラムの見直しや授業改善を図るとともに、一部の学生の過重負担とならないよう、編曲・演奏・音響等の知識・技能をもった後継学生を養成したい、

(3) 備品の充実・楽器更新のための努力

ミュージカルの伴奏のために購入したエレクトーンは、それ以外にも様々な機会でも頻りに活用されるようになったが、旧モデルとなり老朽化している。また、創作指導の研究として導入した40台のタブレットPCも新しいOSに対応していない。教員の基盤研究費は激減しており、楽器更新のためには、科研費等の外部補助金獲得が必要である。研究的な視点で、電子キーボード活用に取り組み、その成果を発表していきたい。

（愛媛大学教育学部芸術文化課程
音楽文化コース しらかわ さゆみ
愛媛大学教育学部音楽教育講座
いのうえ よういち）



写真1 愛媛大学附属病院サマーコンサート



写真2 ミュージカル伴奏



写真3 伊方町盆踊り大会



写真4 ソルフェージュ基礎